歴史地震
第17号(2001) 148-155 頁
受付日 2001/11/6, 受理日 2002/2/18

明治三陸津波(1896年)に関する一部、捏造された史料について

山下 文男*

はじめに

明治三陸津波については、文字による記録の他、当時ようやく技術的達成を見た写真印刷によるリアルな写真や絵画などが、これまた日進月歩の発達をみせていた近代的新聞、雑誌などに掲載されており、津波研究のための貴重な史料として残されている。1996年に迎えた明治三陸津波の100周年を前にして、私はそれらの主だったものを機会あるごとに紹介してきた。が、最近になって、それら当時の新聞や雑誌に掲載された写真や絵画、更に記録の中には、初めから全く別の写真を持ってきてあたかも本物であるかのようにでっち上げた、いわば捏造した写真や絵画、作り話に過ぎない「エピソード」などが一部に混じっていることが判明した。私は不注意にも、それらを鵜呑みにして紹介してきた訳であるが、これらの捏造された写真やエピソードは、私以外の研究者によっても利用されているので、私が、著書に収録するに至った経過を含めてここに事実関係を明らかにしておきたい。

(捏造された「津波石」の写真と絵)

▼ 1984年4月に出版した拙著『写真記録近代日本津波誌』の22ページに、明治三陸津波で打ち揚げられた津波石の絵(写真の1)が転載、収録されている。

出典は、周知の『風俗画報』臨時増刊号『大海嘯被害録』(以下、単に、風俗画報『大海嘯被害録』と呼ぶ)の2冊目、即ち、7月25日付に掲載されているもので「唐丹海角の森林中に打ち揚げし巨石の図」との説明が付されている。風俗画報『大海嘯被害録』の1冊目に載った「予告」によると、同誌編集部は「太田多稼、石塚空翠の二氏」を派遣し、記事と絵画をもって海嘯とその被害情況を報ずるとあるから、絵の筆者は二人の中の一人ということになる。よく見ると、絵には場所が海岸近くであることを示す水平線も描かれている。正に、これは巨大な「津波石」に相違ない、「唐丹」(とうに)とは、田老村に次いで死亡率の高かった唐丹村(現, 釜石市内)のことであろう。こうして私は「唐丹村(岩手県)の森林中に打ち揚げられた巨石の図」として、前記の著書に収録した。

▼ ところで風俗画報『大海嘯被害録』などと並ぶ明治三陸津波の重要な史料の一つに、雑誌『文芸倶楽部』が臨時増刊号として出版した『海嘯義捐小説』(以下、単に『海嘯義捐小説』と呼ぶ)という雑誌のあることは前々から承知していたが、入手が困難で、それまで私は、直接にこの雑誌を見ることが出来ずにいた。が、明治三陸津波の100周年を前に、記念の小冊子を準備する過程で国会図書館から借り出すことに成功し、初めてそれを手にした。発行日は風俗画報『大海嘯被害録』の2冊目と同様、7月25日となっている。見るとそのグラビアの中に風俗画報『大海嘯被害録』に載った上記の絵による巨石を、直接、撮影したものと思われる写真(2)が、「唐丹村字花露里海岸の大石打揚」という説明文付きで掲載されている。風俗画報『大海嘯被害録』の絵は、あるいはこの写真を見て描いたのかも知れない。とすれば、これが原画ということになる。いずれにしろ津波で打ち揚げられたというのであるから「津波石」である。撮影者は「浅草蔵前込山永松氏」と明記してある。「花露里」と言うのは、一字違うが、唐丹村の海岸沿にある「花露辺」(けろべ)のことであろう。

絵だけなら絵空事ということもありうるが、写真まであるのだから、これは明治三陸津波の実相を伝える貴重、有力な史料と言える。そこで、複写した

* 〒022-0211 岩手県大船渡市綾里石浜八ヶ森75

写真に「唐丹村の花露辺海岸に打ち上げられていた数十トンもの巨石。津波の物凄いエネルギーを物語っていた」との説明文を付けて、私が編集発行した明治三陸大津波の 100 周年を記念する小冊子『写真と絵で見る明治三陸大津波』の 18 ページに転載、収録した。

念のために私は、この写真を収録するにあたって現地である旧唐丹村の花露辺を訪れて取材した。当時の大船渡市長白木沢桂氏は、三陸町（気仙郡）の出身で、旧唐丹村や花露辺のことについても詳しく、写真を見せると、津波の時に揚がった石のことは自分も聞いており、今でも、何処かの家の庭先に置いてあるはずだと話してくれたからである。あるなら実物を見たいし、地質学者による鑑定も受けたい。しかし、現地に行って聞き回っても、その石は見つからなかったし、その石を知っているという人もいなかった。もっとも白木沢氏の言う「石」が、この写真の石のことなのかどうかもはっきりしていなかった。何しろ津波から100年も経過して風化が著しいだけでなく、漁港の整備に伴って海岸と地域の環境が当時と大きく変化している。この間に、その石が何気なく何処かに片付けられたのかも知れないし、海に返された可能性もある。そうした例は実際にもある。が、現物は残っていないけれども雑誌に写真が掲載されていて、同じ発行日の別の雑誌には、同じ題材による絵も載っており、全く、疑いようがなかった。

なお『写真と絵で見る明治三陸大津波』の「あとがき」に書いてあるように、この小冊子の、明治三陸津波のメカニズムに関連する部分については、正確を期すために羽鳥徳太郎氏と伊藤和明氏に監修をお願いしたが、レイアウトを含めて他は全て編著兼発行者である私がした仕事であり、問題の写真の収録を決めたのも私の判断によるものであって、お二人は関わっていない。

▼ 明治三陸津波の際に、唐丹村の海岸近くの山中に打ち揚げられたとする巨石の絵と写真を「津波石」として私の二つの出版物に転載、収録した経過は以上のとおりであるが、その後、一読者から寄せられた疑問の手紙に端を発した調査によって、風俗画報『大海嘯被害録』や『海嘯義捐小説』が、この巨石を「津波石」として報道、紹介したのは全くの偽りであって、事実は津波石とは全く無関係な別の巨石の絵であり写真であることが判明するに至った。

それを「津波石」と信じきって紹介した著者としての責任上は無論のこと、津波研究の後々のためにも、私は、このまま黙過している訳にはいかない。従って、この際、拙著『写真記録近代日本津波誌』の 22 ページに収録した問題の絵と『写真と絵で見る明治三陸大津波』の 18 ページに収録した写真は、その説明文とともに取り消すことにした。

（それは「遠野物語」と弁慶伝説の巨石だった）

▼ 明治三陸津波の研究のための重要な史料とされさている風俗画報『大海嘯被害録』と『海嘯義援小説』に掲載されている津波石の絵と写真を、何故、一転して捏造されさたものと判断するに至ったのか。そうした疑問に応えるため、少々、ミステリーまがいの話になるが、以下、順を追って、その経過を報告しておきたい。

▼ 100 周年を記念した小冊子は反響を呼び、その一部が地方紙でも紹介され、問題の「津波石」の写真も新聞に転載された（『東海新報』）。

ところが、それを見た読者のお一人から、この写真の石は「遠野物語」で有名な、岩手県遠野市に実在する「続石」（つづきいし ）ではないのか？ 掲載ミスではないのか？ との問い合わせが私に寄せられた。隣接する住田町（岩手県気仙郡）教育委員会の社会教育主事伊藤豊彦氏からの手紙によるもので、住民の方からそういう疑問が出ていると、その「続石」の写真が同封してあった。なるほど、「続石」の写真は、こちらが「津波石」として紹介した巨石の写真とよく似ている。が、違うところもある。

それで私は、この石を「津波石」と判断した経過を書いたうえ、もし、これが、遠野市に実在する、そ

の『続石』であるとすれば、二人の人間（写真師と画家）と、発行日を同じくする二つの公的な出版物（風俗画報『大海嘯被害録』と『海嘯義捐小説』）が、遠野の山中で撮影し、あるいは、それを描いたものを、ともに、場所は唐丹村の海岸にあった津波で打ち揚げられた巨石であると偽りデッチ上げた、まさにミステリーまがいの話になり、とても信じかねるという返事を書いた。しかし、結果的には、その信じかねることが、事実だったのである。

▼　上記の手紙をもらった私は、まさか？　とは思ったがやはり調査が必要だと考え、友人とともに実際に遠野に足を運んで問題の「続石」を目の当たりにした。場所は、遠野市から花巻市に到る県道から右側に入って約 400 メートル近くも登った山中であった。見ると、立っているその場所によっては唐丹村の海岸に打ち揚げられたとする写真の石と似ているようなところもあるし、似ていない、全くの別物のようにも思える。前記の伊藤豊彦氏の手紙にも、人によっては、全く似ているという者もいれば、全く似ていないという者もあってまちまちだと書いてあった。もともと、そんなことはありえようはずがないとの思い込みが強かったためか、やはりこの巨石は写真の石とは別物であろうというのが、その時の結論になった。が、もしかしたら？　という小さな疑問は残った。

▼　その小さな疑問が、大きく膨らんだのは、その後、別の用事で遠野市に出かけた折、事のついでに、市役所に立ち寄って関係者の説明を聞き、資料に当たるとともに、あらためて「続石」を見直してからであった。

「続石」は『遠野物語』にも収録されている（「拾遺」第 11 話）伝説の石で、観光案内（No. 3）によると、古代人の墓とも武蔵坊弁慶が持ち運んだ石とも言われ、新しく「続石」の登り口に建った案内板にも同じようなことが書いてある。最初に来た時は気付かなかったが、なるほど石の回りには、弁慶が昼寝をした場所などというのもある。それまでは、ひょっとしたら、津波後に運んで来たのではないかとの疑問も残っていたが、要するに、明治の大津波の、その遙か大昔からこの「続石」は遠野の山中にあったことになる。

当日は一人であったうえ天候にも恵まれたので『海嘯義捐小説』に載っている石の写真を片手にした私は、様々な角度から、半日近くも、写真の石と「続石」とを見比べて回った。観光客も来ていた。これも前に来た時は知らなかったが、登って来る道筋は二通りあって、どちらの道から登って来たかによって、石の形は、全く別物に見える（No. 4）。ところが、ある地点に立ってある角度から見ると「続石」は写真の石とぴたりと一致して全く疑問の余地がない（No. 5）。石の置いてある地形も一致する。側に立つ杉の大木が、年輪 30 年程度の若い杉の木と入れ替わっているのは、100 年の間に、前の木は折れるか伐られるかして、新しく植えた木と入れ代わったのであろう。

▼　こうして、問題の写真や絵は、実は遠野市の山中に昔から実在した伝説の「続石」を写したり描いたりしたものに相違ない。それを津波によって唐丹村の花露辺海岸に打ち揚げられた巨石だと偽って雑誌に掲載収録した、これはいわば、捏造した「津波石」の写真であり、絵であるとの考えに達した。それにもかかわらず自分は、不注意にも本物と信じて疑わなかった。弁慶も苦笑しているだろうと私は苦り切った。

▼　その後、首藤伸夫教授（岩手県立大学）のアドバイスによって、問題の写真が『海嘯義捐小説』（年7月 25 日発行）より 10 日も早い、7月 15 日付の『東京朝日新聞』の付録「三陸東海岸大海嘯被害図」の中に、既に収録されていることが分かった。送って下さったそのコピーによると、なるほど写真は全く同一のもので（No. 6）、

「唐丹村は百六十余戸全部流失最も惨禍を極む退潮後見れば同所海岸に巨石を打ち上げ石の上に石を累ねて最奇観なり以て如何に潮勢の猛烈なりしかを想見すべし」

と、まるで見て来たような詳しい説明が付されて

いる。

雑誌の発行日というのは、昔から必ずしも実際に発行された日とは限らないが、日刊新聞の発行日は日付と同一なのを常とする。したがって順を追って経過を整理すると、まず最初に、遠野の山中にあった弁慶伝説による「続石」の写真を持ってきて、津波によって唐丹村の海岸に打ち揚げられた石であるとの虚偽の説明を付けて発表したのは7月 15 日付の『東京朝日新聞』の付録ということになる。それが若干説明を変えただけで7月 25 日付『海嘯義援小説』のグラビア写真として引き写され、更には同日付の風俗画報『大海嘯被害録』の絵にもなって、しかも水平線を描くなどの細工が加えられて「津波石」の「証拠写真」や「絵」が出来上がり、捏造されたことになる。

▼ ただ『東京朝日新聞』付録による写真と『海嘯義援小説』のグラビヤ写真とを見比べると一カ所だけ違う所がある。『海嘯義捐小説』のグラビア写真のそれには、石の下部中央に、よくは読み取れないが、写真の撮影者(写真師いわば著作権者)を示す文字のはめ込み板が見られる。しかし、それより早い『東京朝日新聞』の付録に収録されている写真には、こんなものは付いていない。誰かが後で細工を施したのであろう。一体、本当は誰が撮影したのか？ それを誰が偽造したのか？

先に紹介したように『海嘯義援小説』では、この石の撮影者を「浅草蔵前込山英松氏」としているが、同じグラビア写真の中には、大船渡海岸の写真等「陸中花巻照井政太郎氏撮影」による写真も数点が収録されている。あるいは、花巻に住んでいる写真師照井の撮影した遠野の「続石」の写真を、照井が『東京朝日新聞』に提供し、それに同社編集部が勝手にか、あるいは同意のうえでか、上記のような偽りの説明を付して発表したのかも知れないし、何らかの取り引きによって、それを写真師込山が唐丹村の海岸で自分が撮影したことにして発表したのかも知れない。また「とおの」(遠野)と「とおに」(唐丹)を間違えたことから「多分そうだろう」ということで、見て来たような説明文となり、「津波石」の偽造、捏造に至ったのかも知れない、等々、推理すれば際限ない。いずれにしろ災害現地の撮影のために急遽、東京からやって来たはずの写真師込山が、道順からいって遠野に立ち寄ったであろうことまでは理解できるが、それが脇道に逸れ、わざわざあの山中まで行って巨石の写真を撮ったとはとても考えられない。とすれば、撮影者は照井ということになるが、花巻市役所に聞き合わせると、照井政太郎なる人物は、その後、大正年間に東京に移転しているとのことで、今更調べようも確かめようもない。ともあれ明確なのは、これは捏造された「津波石」であって、実体は、大昔から遠野の山中に座っていた伝説の「続石」に過ぎないということであった。

(恣意的観察による誤り)

▼ それにしても、もっともらしい説明文を付けたり、絵に水平線を描くなど、捏造は実に悪質、手が込んでいて、まんまとそれに騙された訳だが、今、考えると、当時、冷静によく注意して観察していれば、これが捏造された偽物だと見抜くことは必ずしも不可能でなかったと思う。

明治三陸津波で打ち揚げられた正真正銘の津波石は、田野畑村(岩手県)の羅賀(らが)と大船渡市(同)の合足(あったり)海岸に現存する。

羅賀のものは波打ち際から約 360 メートル離れた奥地の畑の真ん中に座っているが、ここの波高は 29 メートル(宇佐美龍夫『新編日本被害地震総覧』)と記録されている。

合足のものは、同じく波打ち際から約 66 メートル奥の杉山の中にある(No. 7)が、この辺の波高は 18 メートル(上同)であった。なお、津波石の周辺に見られる杉の木はまだ樹齢 30 年程度で、津波後に植えられたもののようである。石そのものは二つとも何処の海岸にもあるような変哲もないもので、当時の現場における波高や石の推定重量などから推し量ると、それが津波石であることが納得出来る大きさと言える。

ところで、捏造によって「津波石」にされてしまった問題の巨石は、下部に写っている馬や人との比較で見ても、とてつもない巨大な大石であることが判る。それが打ち揚がったとされている唐丹村花露辺海岸における津波の波高は 13, 8 メートル(上同)となっている。相当な波高とは言えるが、それでも羅賀の波高の半分以下であり、合足の波高にも及ばない。それなのに、羅賀や合足にある津波石と比べて、軽く数倍の重量はあると見られるこんな大石が、杉山の中にまで打ち揚げられるものだろうか？ 仮に、実際に打ち揚がったものとするなら、脇にある大きな杉の木が、全く、被害を受けたふうもなく、悠然と無傷で立っているのはどうした訳か。風俗画報『大海嘯被害録』に載った問題の絵のすぐ下に、津波で根こそぎ倒された吉浜村の雷杉の絵が載っている(No. 8)。これがレアリズムであって、こんなに大きな石が打ち揚がったというのに、その場所に生えている杉の木は無事だったというのは可笑しいではないか？ いや、これだけの巨石が津波で打ち揚げられたということの方が嘘ではないのか？

もし私が、はじめから、このように冷静に絵や写真を観察し、理ぜめに考えていたら、大きな疑問を抱くことになって掲載を見合わせていたと思う。これを要するに、写真とは、文字どおり「真を写したもの」であるし、活字による説明に間違いはあるまいと単純に信じ込んだことによる失敗であった。

なお、捏造されたここの「津波石」の写真や絵を転載、収録した拙著は、かなりの数の専門家や研究者の目に触れているはずだが、何方からも疑問が寄せられなかった。

(信用できない「予備兵根口万次郎の悲劇」の話)

この他にも、津波関係の拙著の中では、当時の新聞や雑誌に載っていた津波にまつわるエピソードを数多く収録、紹介している。収録にあたっては、一応、その真偽を考えて選択したつもりでいたが、後でよく検討して見ると、いくつか、作り話に過ぎないものまで、無比判的に紹介しているので、これについても自己批判的に付言しておく。

たとえば、拙著『哀史三陸大津波』(青磁社)の105～106 ページにかけて「予備兵根口万次郎の悲劇」として、次のようなエピソードを紹介している。出典は、やはり風俗画報『大海嘯被害録』によったもので、原文に付されている挿絵(No. 9)の方は『写真記録近代日本津波誌』(28～29ページ)に収録している。

「只越(宮城県唐桑村)の予備歩兵、根口万次郎は、日清戦争後、護国の精神がますます旺盛になり、何時、敵国が攻めてくるかもわからないと、常日頃その準備を怠らなかった。津波の当夜、大船の走るような響きと共に轟然たる大砲の如き音が聞こえたので、すわ敵艦来たれり！ と急いで用意の軍服を着、剣をさげて海岸に向かって突進した。そこを山なす怒濤に捲きさられ、行方しれずとなった。その後、海辺に死体が漂着したが、その手には、なお剣が持たれたままだったと聞く」

(なお、これも首藤伸夫教授のアドバイスによると、このエピソードの初出は、津波から12日後の6月27日付け『毎日新聞』で、「兵士剣を握りて海嘯に死す」との小見出しの下に、内容的にはやはり同じようなことが書かれている。ただし、初出の『毎日新聞』では、唐桑の只越ではなく「岩手県気仙郡唐丹村の根口萬次郎」となっている)。

日清戦争の直後のことでもあり、また、同様『哀史三陸大津波』(103 ページ)に収録した、同唐桑村大沢の漁師伊藤彦三郎の体験談(『東京日日新聞』による)、即ち、黒船の破裂弾のような轟音がしたので「ああ、これはかねて聞いていた黒船が復讐のために海岸に来て破裂弾を撃ちこんでいるのだ」と思ったという話などもあったので、疑いを入れず、原文を若干省略しただけでほとんどそのまま転載したものであった。が、その後の検討によると、このエピソードは明らかに作り話に過ぎないものであった。

根口万次郎のエピソードは、直接、風俗画報『大海嘯被害録』に拠ったものか、それを収録している

拙著に拠ったものかは別として、研究者が津波に前駆する大音響を論ずるにあたってよく利用されているので、ついでながら、私の考えと検討結果をここで明らかにしておきたい。

今日では周知のように、明治三陸津波は「津波地震」による津波で、事前の地震の震度は2～3程度のものであった。そのため、津波の襲来を予想した人は皆無に近く、ほとんどが不意打ちを食らった。記念碑の文章など、庶民的な記録の多くが、いきなり津波の襲来に始まっているのはそのことを示している。前記、伊藤彦三郎なども、親戚の法事に出席して仏間の前に座っていた時、「入り口の方でなんともいえない大きな力でたたくような音が」したと思うと「轟々とした音が耳に響くと同時に、頭の上から水が滝のようにかぶさってきて、たちまちわれを失って」しまったと語っている(重傷)。

それなのに、同じ村で、場所も近くのはずの「根口万次郎」の方は「大船の走るような響きと共に轟然たる大砲の如き音」を耳にするやいなや、軍服を着用したうえ、剣を下げ、海岸に突進したというのである。今の消防団員が火事などの放送を聞いてから団服を出して身をかため、家を飛び出すまで5分前後はみなければならないと言われているが、明治三陸津波の時は、そんな余裕もなかったはずであるから、伊藤彦三郎の話の方が本当で「根口万次郎」の話の方は、勇ましいが嘘っぽいことになる。いや伊藤彦三郎が聞いた大音響は津波が海岸近くに来てからの音であり、根口万次郎の聞いた「大砲の如き音」は海上、遠くから聞こえてきた音だという言い分も成り立つかも知れない。が、それにしても、このエピソードは余りにも出来すぎている。特に、死んでも手にした銃を放さなかった等は「死んでも口からラッパを放しませんでした」というキグチコヘイの軍国美談のようなもので、軍国イズムをかき立てるための創作の匂いがしてならない。そう考えて、昔の戸籍などに当たり、現地で聴き取りを行って見ると、伊藤彦三郎は実在したが、調査したかぎり「根口万次郎」は実在の人物でなかった。あるいは、新聞に載った伊藤彦三郎の実話にヒントをえてでっち上げたのかもしれない。

(むすび)

明治三陸津波に関する当時の新聞や雑誌は、それぞれに史料として貴重なものであるが私の調査によると風俗画報『大海嘯被害録』などの雑誌に掲載されている情況記事の中には、新聞の記事にちょっと手を加えて焼き直した程度のもの、興味本位に書き綴ったと思われるもの、「根口万次郎の悲劇」のように、全くの作り話に過ぎないと思われる記事等もかなり含まれており、それらの一部を無比判に利用した不明を恥じ入るばかりある。

それにしても明治三陸津波の重要史料とされている公刊の出版物の中に、捏造されたこんな「証拠写真」やエピソードが混じっているなどとは、これまで思いもよらないこであった。何に関わらず、出来すぎたエピソードや史料には注意と吟味が肝要だと、今、痛感している。

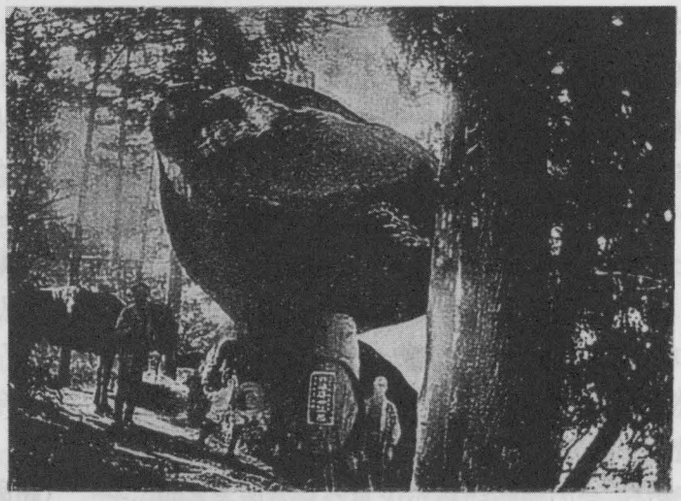
(謝辞)

最後に、唐丹村に打ち揚げられたとする「津波石」について、率直な疑問を表明し、再検討の機会を与えて下さった岩手県気仙郡住田町教育委員会の伊藤豊彦氏と住田町の住民の方、更に、アドバイスと資料の提供をいただいた岩手県立大学の首藤伸夫教授に心からのお礼を申し上げたい。

参考文献

『大海嘯被害録』(『風俗画報』臨時増刊)
『海嘯義援小説』(『文芸倶楽部』臨時増刊)
「三陸東海岸大海嘯被害図」(『東京朝日新聞』明治29 7 15号付録)
宇佐美龍夫『新編日本被害地震総覧』
山下文男『哀史三陸大津波』
『写真記録近代日本津波誌』『写真と絵で見る明治三陸大津波』.

No. 1 『大海嘯被害録』収録
の「津波石」の絵



No. 2 『海嘯義捐小説』収録
の「津波石」の写真

No. 6 『東京朝日新聞』付録
の「津波石」の写真

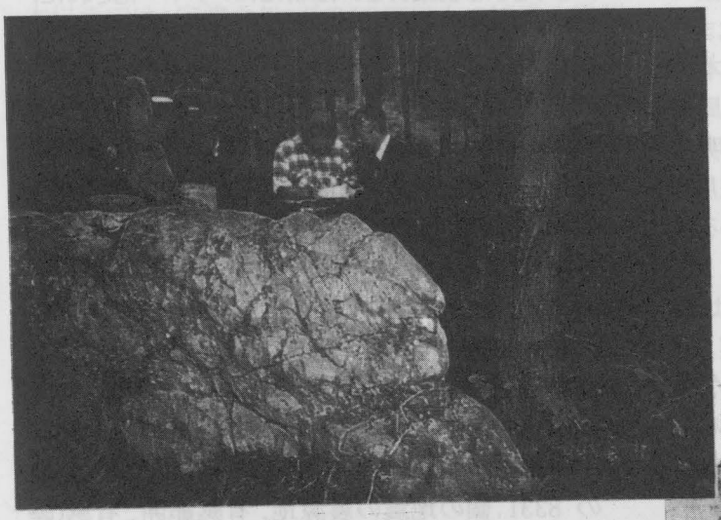
No. 5 遠野市の観光案内
による伝説の
「続石」

⑰ 続石　5-B

「遠野物語」の第91話に出てくる奇岩で、古代人の墓とも、武蔵坊弁慶が持ち上げて作ったともいわれています。

No. 3　遠野市の観光案内による「続石」

No. 4　角度によって石は違って見える



No. 7　大船渡市合足海岸にある本物の津波石

圖これか救の杉神雷の領甫字村濱吉

No. 8　津波で根こそぎ倒された吉浜村の雷杉『大海嘯被害録』掲載

村柔唐圖のるを貫突に岸海り誤と来襲艦敵と嘯海士兵一

No. 9　根口万次郎の悲劇の挿絵『大海嘯被害録』掲載